

幼児の物語理解プロセスの究明 5・6歳児を対象とした絵本の読み合い時の反応に着目して

Research on story understanding process of infants:
An attention to 5-6years old infants' oral responses to picture books

山元悦子

Etsuko YAMAMOTO

国語教育ユニット

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

1 本稿の目的

幼児(5・6歳児)は、絵本を読んでもらうとき、どのような物語理解プロセスをたどるのだろうか。本稿の目的は、この問題を事例分析を元に明らかにすることにある。

5・6歳児の物語理解は、文字情報からイメージや意味を作り出す以前の段階にある。物語は、絵本を自分に読んでくれる読み手の読み声と共に手渡され、そこに物語世界が共創されていく。幼児の物語理解は、文字情報が読み手の読み声というファクターを通して伝わっていく活動なのである。

この活動の内実を明らかにすれば、活字読書へ向かう過程の初期にあたる小学校入門期において、児童の物語理解の実態を念頭に置くことによって、そこにどのように働きかけていくことが有効かについての示唆を得ることができるであろう。また、この解明を手がかりに、小学校入門期の読むことの学習を幼児期との接続を配慮したカリキュラムにする視点を得られると考えられよう。

なお、本稿で扱う<物語>とは、中心となる人物の行動を軸として何らかの筋が展開していく完結性のある話を意味している。

2 なぜ絵本の読み合いに注目するのか

国語教育は、児童・生徒の言語能力の成長を目的とする。言語の担う機能には、①言葉による意思の伝達を通して人間関係を築く機能、②思考活動を司る機能、③言葉によって共同社会を築く機能がある。国語教育は、これらの機能を発揮して言語活動を営む児童生徒を育てることを目的としているといえよう。そして、絵本の読み合いは、これらの機能が混沌と発現する活動だと考えられる。本稿が扱っている絵本の読み合いとは、読み手と聞き手の二人が場を共有し、読み手の声と絵本の頁の絵が、読み手の頁めくりによって聞き手に提供される活動を指す。読み聞かせとは異なり、途中で聞き手のつぶやきなどの反応に、読み手が応じることも行われる。読み手の読み声を媒介に、頁めくりによって進む時空間を通して幼児の内面に物語が展開していく活動である。この活動は、読み手とのやりとり関係の中で、幼児の内面で様々な思考や感情が展開していく活動であり、これは物語世界をくぐることで①から③の機能が混沌と働く原初的活動であると考えられよう。

では、絵本の読み合いにはどのような特性と価値があるのだろうか。米田(2010)は、文字によって著された物語を理解することを「文字情報からなる言語の集積を、一貫した意味を持った情報として脳の中で構築すること」と定義した。これに対して、絵本の読み合いを通じた物語理解は、米田の説明する物語理解と

は異なり、隣で一緒に聞いている幼児の笑い声、つぶやきなども含めた情報源を多様に持った物語理解が行われる特性を持つ。

正置(2018)は、幼児にとって言葉は声として入ってくるものであり、幼児は声の言葉とからだを通して自分の捉えた意味や意図を表現することを指摘し、幼児の言葉を「からだ語」と名付けている。この概念は文字の読み書き以前の言葉のありようを捉える点で注目に値する。絵本の読み合いは、この、読み手の声とともに言葉を受けとめ、言葉と身体で自分の思いを表現する「からだ語」が観察される場と考えられるからである。

また、絵本の読み合いでは、人物の行動を追いつつながら自己投影的に他者の心の理解がはかられる。幼児の場合、生活経験を参照しながら成人以上に作中人物を我がことのように感じたり、見物人的スタンス^{注1}で眺めたりしながら、人間のありようの多様さに出会う場が提供される。

そして、そこには共感力が必要である。共感とは、他者の内的状態を同定する認知的共感に始まり、推察された他者の心的状態に対して適切な感情反応を引き起こす情動的共感が生まれていくといわれている。^{注2} これらの共感力を働かせながら、聞き手である幼児は物語世界に移入し、我がことのように物語世界に没入したり、あるいは一歩引いて眺めながら物語に同行する。その過程で、人物の心を理解し、物事の間接関係を理解し、社会を疑似体験すると考えられる。

物語は、世界の事象を一つのフレームによってくり出す。物語世界を疑似体験することによって、幼児は自分が生きている世界を捉える枠組を手に入れる。このような物語との出会いをもたらし機会となるのが絵本の読み合いであると仮説した。

さらに、絵本の読み合いは、絵本という共同注意対象を巡って言葉のやりとりがなされる場でもある。読み合いの中では、文脈を伴って新しい語彙や構文の理解がはかられ、類推や予測を働かせる思考が活発に行われる。それに加えて、今ここで生まれた思いを言葉を使って伝える他者(読み手)がそばにおり、応じてくれる。その過程で新たな言葉が場に生まれることも起こる。このような双方向的で相互作用的な場が、絵本の読み合い活動で生まれると考えられる。

やまだ(2017)は、「言葉は、養育者と子どもがともにいる「ここ」という場所で、ともに見、ともに行い、ともに感じていることがらについて、共同体験していることをともに語り合う行為から共同生成される。」と指摘している。この共同体験の場を提供できるのが絵本の読み合いであり、実感を伴った言葉の獲得がそこではなされるのではなかろうか。

このような点から、絵本の読み合い活動は、共感を伴いながら他者の心を推察する人間関係形成の基盤活動となり、そこでは類推や予測や因果関係を見いだそうとする思考活動が営まれ、社会のありようを疑似体験する場となることが期待できる。つまり、絵本の読み合いは、先に挙げた言葉の3つの機能が融合した言語活動であるとみなすことができよう。

3 幼児の反応をどう把握するかー反応分析のパースペクティブー

3.1 事例分析という手法について

幼児は読み手と絵本を読み合う過程において、どのような思考活動を行っているかを解明するために、本稿では事例分析の手法をとった。

これまでの物語理解のモデル研究では、プロセスのモデル化したものに Kintsch (1992) の構成・統合モデルを始め種々のモデルが提案されている。^{注3} 特に「物語スキーマ」と「物語文法」が注目されているが、これらの研究が問題にしている物語の構造の理解について、幼児を対象にその実態を明らかにする研究には、由井(2002)がある。物語文法が指摘する、物語が典型的に持つプロセスを念頭に置いて、物語の内容の再生率を根拠に内容の一貫性を保った理解の発現状況を調査するものである。内田(1983・1989)は、人物の意図や目標を読み聞かせ前に先行情報として与えると、4歳に至る頃には因果の原理によってストーリーの文章産出が促進されることを指摘した。由井(2002)は、この意図情報の明示が、作動記憶容量が小さく文章全体の理解が困難な幼児の情報処理の効率を助けると指摘している。絵本を読み聞かせたときの幼児の認知状態の究明に関しては、高橋・杉岡(1994)が、幼児の物語理解の際にエピソードの繰り返しが明確なものであるかどうかによって物語の再生率に違いが生じるとし、久保(2017)は、類似経験を想起させる方が、他者の内面に関わる情報に注意することを明らかにしている。

研究の方法としては、読み聞かせ後の話の内容に関する記憶の再生や、質問への応答反応を根拠にするものが多い。例えば、高橋・杉岡（1994）は、物語の全体を再生して説明を求めるものである。福田（2017）は、絵本の読み聞かせ時の幼児の反応を発話カテゴリーを設けて分類し、絵本読みのルールについての発話が5歳児に多いことを示したものもある。また、佐々木（2012）の行った、絵本の場面ごとに発話数・発話内容を計量したもの、沢田他（1973）のような個別面接による質問への言語的説明を扱ったもの、小林（1997）は、笑いや指さしなどを含めた幼児の反応をカテゴリー化して分類している。これらの研究はいずれも19名から242名の幼児を対象とし、数量による信頼性の担保を図りながら、あらかじめ研究者が設定したテーマ（問題）に対して明らかにしようとする実験的手法をとっている。

それに対して、本稿では、エピソード記述^{註4}を参考にしながら、読み手と幼児の対面のやりとりに現れる幼児の心的状況を関与観察^{註5}する手法をとった。読み合いは、幼児の自宅で、就寝前と日中に実施され、対面という近い空間とくつろいだ時間で行われた。また、読み手が対象幼児の家族であり、生育を共にしているため両者には愛着と信頼関係が成立している。その上、読み手が幼児の生育の歴史を知り、読み合いの蓄積があるため、幼児の反応の背景をより適確に推察することができる。本研究の目的は、幼児の内面で展開していく物語理解プロセスを明らかにすることにあるため、この手法によって、より自然で自由な反応を引き出し、計量的な調査分析や集団観察では扱いにくい、個々の幼児固有の、物語理解プロセスをひとつのストーリーのようにたどることができると考えた。

3. 2 観察対象と観察方法及び使用絵本について

2名（Y児・I児）の5歳～6歳期（2019年8月～2020年3月）にそれぞれ2回行った読み合いである。Y児を対象とした事例の読み手は母親（M）であり、Y児とは頻繁に読み合いを行っている。この事例は就寝前に10分程度で行われた（2019.8.28, 2020.3.13）。それをICレコーダーに収録し、事後にそれを稿者と母親で聞きながらその場の幼児の反応や言葉のやりとりについて考察を行った。I児を対象とした事例は、I児の叔母である稿者（E）とI児とのあいだで実施された。I児との読み合いは、これまでに10回程度行っている。この事例は、日中に10分程度行った読み合いを音声と動画で記録し、稿者が考察している（2019.8.27, 2020.3.27）。

使用絵本は以下の2冊である。

1『そらいろのたね』こどものとも傑作集 第82刷 中川季枝子文 大村百合子絵 2005 福音館書店

2『まーくんとくま』初版 ジェズ・オールバラ作・絵 野口絵美訳 2004 徳間書店

2冊の絵本の主人公は、対象児が自分と重ねやすい年齢と思われる男児である。物語の出来事も、花の種を植える、取り替えっこをする、ぬいぐるみをなくすといった、対象児が状況を体験的に理解できるものとなっている。物語の展開も、事件の発端が簡潔に語られ、繰り返しによって話が進み、山場を迎えている。最後の頁の結末も明確であり、総じて物語の典型性を備えているために選んだ。また、絵本2は、二人の登場人物の対比的な台詞を中心に進み、状況説明的な文章がないため、読み手の声からの情報や絵からの情報をもとに内容を推察する思考活動が必要となる。

観察対象は、対象児の発話内容・表情・行動である。それらを通して対象児の注視対象や、因果推論、展開予測等の思考活動の様態を捉えることを目的に行われた。

4 幼児の反応分析

4. 1 事例1 『まーくんとくま』

表記について

「」は絵本の文章を指す。絵本の言葉はすべてひらがなで書かれているが、本記録の表記は理解しやすいように適宜漢字に改めた。()中の文は、稿者が状況を説明したものである。番号は、考察に引用するために付している。

物語の構造とストーリーの概要

『まーくんとくま』は12場面から構成される大型絵本である。小さな男の子まーくと大きなくまが、それぞれの持っていたくまのぬいぐるみをなくし、森の中を探しに行く物語である。表紙には緑の深い森の中で大きなくまが、くまのぬいぐるみを抱えて慌てて右の方へ走っている絵が対比的に描かれている。カバー

の袖には、男の子（まーくん）が、表紙のくまと同じ格好で小さなくまのぬいぐるみを抱えて慌てて右にある森の中へ走っている絵が対比的に描かれている。第1場面では、まーくんがなくしたぬいぐるみを探すために森の奥へくねくねと続く道を心配そうに歩いている。第2場面は、一人で暗い森の中を歩くまーくんの姿と、「怖いよーおうちに帰りたい。だけどくま君を見つけなきゃ」という心境が台詞で語られる。森の中をキョロキョロしながら進んでいく（第3場面）まーくんは、小さなくまが抱えていたぬいぐるみを見つけ（第4場面）、自分のぬいぐるみが大きくなったと思い込み、「どうしてそんなに大きくなっちゃったの？これじゃ抱っこができないよ。一緒に寝たらベッドからはみだしちゃう」とつぶやく（第5場面）。そのときここからか、そっくり同じことを泣きそうな声でつぶやく声が聞こえてくる（第6場面）。次の頁に現れたのは頁いっぱい描かれた大きなくま。手にまーくんの小さなくまのぬいぐるみを抱えている（第7場面）。まーくんはおびえ（第8場面）、くまもまーくんを怖がり（第9場面）ながらも、お互い間違っただけで相手のぬいぐるみを持っていることに気づき（第10場面）、二人とも自分のぬいぐるみを抱えて一目散に逃げ出す（第11場面）。最終場面（第12場面）では、左の頁には大きなくま、右の頁には小さなまーくんが、うちに帰ってベッドにもぐりこみ、ぬいぐるみを抱えて目をまるくして寝ている姿が対比的に描かれている。絵本の展開は、全体を通して、くまとまーくんが同じ行動をし、それが対比をなして進んでいく構造となっている。

4. 1. 1 Y児（5歳6ヶ月）の反応

表紙

Y①：くまはこっちで、まーくんがこっち。

第1場面

M：「まーくんが森でなくしたぬいぐるみ。名前はくまくん。」

Y②：ええ？（こんな暗い森でなくしたの？という想い。迷路のような絵なのでどこにぬいぐるみがあるか目で探している）。

M1：ええ、おらんね。／Y③：おらん。たぶん。

第4場面

M2：「おっきなくまのぬいぐるみだ。『驚いたなあ。くまくんたらどうしてそんなにおっきくなっちゃったの？』」。うーん確かに。

Y④：ふふふ これただのくまやん（本物のくまと思っていたらしい）。

M3：ただのくま？

第5場面

M：「これじゃ抱っこができないよ。一緒に寝たらベッドからはみだしちゃう」。

Y⑤：うふふ だってこんなにちっちゃいけん
(まーくんは小さい)。

M4：ちっちゃい？

Y⑥：これね。人がちっちゃいからはみ出しちゃう。(まーくんが小さいのでまーくんサイズのベッドならこんなに大きなぬいぐるみは一緒に寝たらはみ出す)。

M5：はみ出しちゃうか、そうかそうか。

Y⑦：顔もでっかいけん。

M6：顔ね。ぬいぐるみの顔もでっかいってこと？

Y⑧：何も入らない。(ベッドに入らない)。

第6場面

M：「そのとき、変な声をした。なんだか泣いているみたいだぞ。だんだん近くにやってくる。『どうしてこんなにちっちゃくなっちゃったの。これじゃ抱っこができないよ。一緒に寝たら、ベッドの中で迷子になっちゃう』」。

Y⑨：誰が？（誰が話しているのかわからない様子）。

M7：誰だろうね。どういうこと？

Y⑩：知らん。／M8：知らんねえ。

第7場面

M9：「現れたのはおっきなおっきなくまだった。ちっちゃなちっちゃなくまのぬいぐるみを抱えている」。

Y⑪：(状況がわからない様子)。

第8場面

M：「どうしよう。くまがこっちへやってくる。」

Y⑫：(沈黙。くまが抱えている小さいくまのぬいぐるみを注視する)。

第9場面

M10：「みつけた，ぼくのくまちゃん。くまが手をのばすと，まーくんはとびのいた。きゃーくま，こないで！」。きゃー来ないで，だって。

Y⑬：(小さいくまのぬいぐるみを指して) こっちよ。(まーくんが大きいぬいぐるみを自分のものだと思ってたことは間違いだと気付いたため(まーくんのぬいぐるみは)「こっちよ」とつぶやく)。

M11：どっち？どれが？。あっこのくまのぬいぐるみがこっち？／Y⑭：うん。

M12：あーそうか。

第10場面

M13：「あっぼくのくまくん」だって(大きいくまがそう言っていることを促す)。

Y⑮：ひゅーん(小さいぬいぐるみがくまの腕から滑り落ちるのを指さしながら)。

第11場面

M：「それから，まーくんもくまも暗い森を一目散。逃げて逃げて・・・」

Y⑯：同じ。同じやん(くまとまー君が二人とも自分のぬいぐるみを抱えて逃げていることを同じと表現している)。

M14：同じやね。そうだね。

第12場面

M：「ようやくおうちにかえって，自分のくまをぎゅーっと抱きしめたんだよ」。

Y⑰：ふふ(笑い)／M：はい，おしまい。

考察 Y児のたどる物語理解プロセス

保育園にぬいぐるみを抱えて登園するI児は，ぬいぐるみにとても愛着を持っている。そのため，暗い森でまーくんがぬいぐるみをなくしたことに驚き，どこにあるのか探そうとした②。その気持ちを酌んでMは，「おらんね」と声をかけた(M1)。I児は一気に物語世界へ移入していく。また，場面ごとにベットからはみだすぬいぐるみを想像して楽しんだり⑤，滑り落ちるぬいぐるみの様子を指で表現したり⑮，逃げるくまとまーくんの姿(絵)が同じであることに関心が向けられる⑯。文中の会話文の話し手がだれであるかは，前の場面との繋がりや繰り返し表現であるという情報を関係づけて推論しなければ理解できないが，それはわからなかったようだ⑨。が，ぬいぐるみの取り違えには気付き，「こっちよ」とつぶやいた⑬。MがY児の言葉をリボイスしながら疑問を投げかける(M4)と，自分の考えの理由を二語文程度で伝えることもある⑥。頁ごとの絵からの情報に関心が向けられ，視覚優位の読み方で物語理解を進めている。

4. 1. 2 I児(5歳7ヶ月)の反応

表紙

E15：「まーくんとくま」。どんなお話と思う？

I⑱：わかんない。くまのお人形抱っこしてる。この子(お人形)は(自分の)子どもだと思ってるの。

E16：子ども？あーそうね。

I⑲：それで，迷子になっちゃった。

E17：あー迷子になってるから，それで(くまはこまったような)こんな顔してるんだ。

内とびら(とびらの絵の背景は薄暗い森。ぬいぐるみを抱えて慌てて走るまーくんの姿と物語に誘うリード文が書かれている)。

I⑳：(袖の文字を見る)。早く読んで。

E18：これどこ？(袖の口絵を指しながら)。

I㉑：森。

E19：あー森の中。

I㉒：じゃけ，くまがおるの。

E20：あーくまは森にいるもんね。そうね。

第1場面

E:「まーくんが森でなくしたぬいぐるみ, 名前はくまくん」。

I ㉓: (視線で道を追いながら熊を探す) じゃああのくまは?

E21: これ? (表紙に戻って尋ねる)。/ I ㉔: (頷く)。

E22: あーこれかね。/ I: (頷く)。

I ㉕: (第1場面に戻ろうとすると) いや, あの灰色のお人形。

E23: 灰色の? (表紙に再び戻って聞いてみる) これかねえ。

I ㉖: 頷く (なくしたぬいぐるみは表紙のぬいぐるみであるという意味)。

E24: これね (茶色のぬいぐるみであると確認)。

I ㉗: だって小さいから。大きいのは無理でしょう。(表紙の大きいくまはぬいぐるみにしては大きすぎるので, くまの抱えているくまの人形がなくしたぬいぐるみだという意味)。

第2場面

E:「まーくんはひとりで暗い森の中にくまくんを探しに来た」。

I ㉘: えっ怖そう。

E: 怖いよー。おうちに帰りたい。だけどくまくん見つけなきゃ。」。

I ㉙: くまくんのために頑張ってるんだね。(頁の下が破れているのに気がついて) あれ, 待ってなんかある。何か仕掛けがあるかと期待する)。

E25: 破れちゃってる。なんかあるかね。破れちゃってるだけかも。

I ㉚: これお城なんだよ。これ, 絶対。

E26: お城?

I ㉛: ほら。

第4場面

E27:「おっきなくまのぬいぐるみだ。『驚いたなあ! くまくんたらどうしてそんなにおっきくなっちゃったの?』」。どうしたんだろう。

I ㉜: くまに, かじっとなって。

E28: くまにかじられた?

I ㉝: で大きくなった。

第6場面

E:「そのとき, 変な声が出た。なんだか泣いてるみたいだぞ。だんだん近くにやってくる。」。

I ㉞: それ, くまやろ。(やってくるのはくまだろうという意味)。えっどっちが本物? (場面が上下に切り分けられているため, ぬいぐるみのくまの絵をたたきながら, 場面上のぬいぐるみと下のぬいぐるみのどちらが本物か疑問が湧く)。

E29:『どうしてこんなにちっちゃくなっちゃったの? これじゃ抱っこができないよ。一緒に寝たらベッドからはみだしちゃう。』」。

第7場面

E「現れたのは おっきなおっきなくまだった。ちっちなちっちなくまのぬいぐるみを抱えている」。

I ㉟: いや, 反対でしょう。

E30: 反対?

I ㊱: 反対って (前頁をめくり) こっちの大きいくま (のぬいぐるみ) が, (頁に戻り) こっちのくま (大きいくまのぬいぐるみ) で, こっちの小さいくま (のぬいぐるみ) が, (前頁に戻って) こっちのくま

E31: まーくん (くまと言いかけたので訂正する)。

I ㊲: こっちの子。

E32: まーくんのくま (のぬいぐるみ) なの?

I ㊳: (頷く)。

第9場面

E:『『みつけた! ぼくのくまちゃん』 くまが手をのばすと, まーくんはとびのいた。『きゃー, くま, 来ないで!』』

I ㊴: えっ?

E33: (まーくんを指さしながら) くまこないでー。

I④⑩: なんですよ。私、でもこっち(まーくん)を見つけたんじゃないくて、こっちよ(大きいぬいぐるみを見つけたという意味)。(自分で頁をめくり次を知りたがる)。

第10場面

E34: 『きゃーっ、男の子、こないで!』 くまさんが言ってるよ。

I④⑪: えっ?

E35: 『男の子、こないでー』。

I④⑫: なんで? (じっと考えている)。

E36: なんてだろう。

I④⑬: だってこのお人形(くまの持っているぬいぐるみ) こっちと(小さいぬいぐるみ) お人形間違えてるからやろ。

E: 『あっ、僕のくまくん!』

I: (次の頁に進みたがる)。

第11場面

E: 「それから まーくんもくまも暗い森を一目散。逃げて逃げて…」。

I④⑭: なんで?

E37: どっちも逃げてる。

I④⑮: なんですよ。(台詞を創作し大きいくまの声で話す) 「僕のくまちゃんをとろうとしてる」。(小さいまーくんの声で) 「ぼくのくまちゃんをとろうとしてる」。

第12場面

E 「ようやくおうちにかえって、おふとんにもぐると、じぶんのくまくんをぎゅーっと抱きしめたんだよ」

I④⑯: (左右のくまとまーくんがベットに入っているのを見比べて) くまのほうを見つめ、待って、こっち、でかい。

E38: うん、でかいね。

I④⑰: (12場面に戻り、まーくんのベットを見て) こっちちいさい。

E39: うーんこっちちいさいねえ。

I④⑱: ていうことは、(表紙のくまを指しながら) こっち走ってて、そのまま、あっ何で戻すの(Eがめくりかけた頁を戻す)、そのまま(ぬいぐるみの) くまちゃんを落としちゃったってこと(最初から頁をめくり、7.8場面のあたりで)。そして、この子(まーくん)も走ってて急にやっちゃったって(落とした)ってこと(頁をめくりながら)。で、この子も走ってて、急にやっちゃったってこと。

I・E: おしまい。

考察 I 児のたどる物語理解プロセス

I 児は、E の促しもあって、表紙の絵から想像したマイストーリーをたちまち作り上げた⑩⑪。口絵が暗い森であることも、森だからくまがいるのだと理由付けて理解していく⑫。なくしたぬいぐるみはどこにあるのかをずっと念頭に置いて読み進めたり⑬、人物の言葉に共感的理解を示す言葉を発している⑭。ぬいぐるみの取り違えに気づき、頁をめくる所作を通して指示語(こっち)を使って説明していった⑮。会話文の意味する人物の思いがわからないときは、しばらく考えて⑯自分なりの結論を出し⑰、人物の思いを声色で表現した⑱。E は、I 児が疑問を抱いた場面の会話文のキーワードをもう一度繰り返して読んだり、I 児の疑問の言葉をリボイスし、I 児の考える時間をじっと待っていた。それがI 児の言葉を引き出す契機となった。I 児は、なくしたぬいぐるみはどこにあるか場面を関係づけて見つけようとしたり⑲、誰が話しているのかを状況から推測したり⑳、人物に感情を寄せたり㉑、最後には対比的構造に注目し⑳㉒㉓、そこから、書かれていないくま側のストーリーを想像して作り上げる㉔。物語に移入したり、物語から一歩引いて解釈の一貫性を作りながら読んでいく、ストーリー優位な理解過程をたどっている。

4.2 事例2 『そらいろのたね』

『そらいろのたね』は、13場面から構成されている。以下にストーリーの概略を示しておく。観察対象児と年齢が近い容姿の男児「ゆうじ」が野原で模型飛行機を飛ばしているところに森のきつねがやってきて、お互いの宝物である「そらいろのたね」と模型飛行機を取り替える(第1場面)。ゆうじが庭に種を植える

(第2場面)と、「そらいろのいえ」が生えてくる(第3場面)。家は少しずつ大きくなる。そこへひよこがやってきてドアを開けて入る(第4場面)。次に猫が入る(第5場面)。つぎにぶたがやってきて入る(第6場面)。次にゆうじが入り、あそびにやってきた太郎、花子、しげる、ひろし、くみこが家に入る(第7場面)。家は休まず大きくなり、さらに、うさぎ、りす、はと、いのしし、たぬき、ぞうがやってきて入っていく(第8場面)。家はお城のように立派になり、町中の子どもと森中の動物がやってきて家の中に入っていく(第9場面)。そこへきつねもやってきて「飛行機は返すからこのうちも返して」と言い、「おーいこのうちは僕のうちだからね。だまっちはいらぬいでよ。みんな出て行っておくれ」と大声でどなったため(第10場面)、子ども百人、動物百匹、鳥百羽が家から出て行く(第11場面)。きつねが大いばりでドアや窓を残らず閉めると家が急に大きくなっていき、ゆうじが「あ、たいへん!おひさまにぶつかる」と叫んだとき家は急に崩れ始める(第12場面)。頭を抱えて地面にうつぶしていたみんなが頭を上げたときには、「そらいろのたね」と書いた看板(画用紙)とびっくり仰天して目を回したきつねが伸びていた(第13場面)。

4. 2. 1 Y児(6歳1ヶ月)の反応

第1場面:

M:「『あげないよ。だってこのひこうきはぼくのたからものだもの』とゆうじがいうと」

Y①: これ宝物の飛行機。

M1: うん、これが宝物の飛行機ね。

Y②: 目があるみたい。

M2: そうやね。目があるみたいやね。

第6場面: 「窓に、ひよこことねことぶたの、嬉しそうな顔が並びました。」

Y③: えっ どんな顔?

M3: どんな顔かな。うれしそうな顔。

第7場面

Y④: あー おっ(発見)おうちだ。本当の。

M4: 本当のおうちになってきた。

Y⑤: ほら。これゆうじくん。

M5: ああ、ゆうじくんがはいれるけーね。そうやね。

Y⑥: ねえ、ひろしとくみこってどっち?

M6: どっちかなあ。最初に来たのが太郎と花子。こっちかな。そしてしげる。ひろし。くみこ。くみこちゃん(中央の人物)ね。しげるとひろしはどっちかわからんけどね。家に来たんよね。

第8場面

Y⑦: わ、でかくなった(驚く)。あ、ぞうさんもおった。

M7: ぞうさんも来てる。

第9場面

Y⑧: あっ、ぐりとぐら。

M8: ぐりとぐらいるねえ、よくわかったねえ。

Y⑨: あら、かめがおった。

M9: これなんだろうね。

Y⑩: おおかみ。

M10: ああ、おおかみねえ。たしかに。

Y⑪: 歩いとる。

M11: あー歩いとるねえ。

Y⑫: ぞうさんも歩いとる。

M12: よくぐりとぐらわかったねえ、Yちゃん。

Y⑬: だって、色でわかる。

M13: 色でわかる? ああそうか洋服の色?

Y⑭: と、帽子の色。

M14: ああ、帽子の色でね。

Y ⑮：しか（がいる）。

M15：しか？ああ、しかもいるねえ、いろんなのが来たねえ。次行っていい？

第10場面

M16：ああ、最初の（冒頭に出てきた）きつねやねえ。

Y ⑯：誰が言っとんか？／M：うん？

Y ⑰：この人が言った？（きつねを指しながら）

M17：そう。きつねが言った。「みんな出ていってよー」

第11場面

Y ⑱：どこおる？

M18：ここ。これきつねやろ？

Y ⑲：ああ、きつね。ねこと思った。

M19：これきつね。最初のきつね（物語の始めに出てきたきつね）やろ。これ。

Y ⑳：あー確かに。

M20：うん。「ドアが開いて（と次を読もうとすると）

Y ㉑：でもさ、このまる（きつねの耳に描かれた線）がさ、こっちにないよ。

M21：ふーんそう。まるってどれ？／Y ㉒：ここ。

M22：あー耳。耳のちょんがここにない？／Y：うん。

M23：うん、そうやね。「ドアがあいて子どもが百人・動物が百匹、鳥が百羽出てきました。」

Y ㉓：これとこれ。

M24：ああ、ぐりとぐらも出てきたねえ。

Y ㉔：へび。ああ、さっきの（ひよこがいることを発見）。

M25：ああ、さっきの？ひよこ？／Y：うん。

M26：ひよこでできたねえ。なるほど、ちっちゃい。

Y ㉕：あっ、つ（女の子が）亀抱っこしてる。

M27：亀抱っこしてるねえ、女の子がねえ。

第12場面

M：「みんなは頭を抱えて、地面にうつぶしました」。

Y ㉖：どこ？ゆうじくん。

M28：ゆうじくんどこかなあ。／Y ㉗：おもて？

M29：これかこれか。／Y ㉘：こっちとか。

M：うん。／Y ㉙：これ？

M30：このひとがゆうじくんやねえ。そうやねえ。おうちが崩れちゃったんだよ。

Y ㉚：なーにそれ、みせてみせて。

M31：じゃーん（頁をめくる）。

Y ㉛：はあ。

M：おしまい。

Y ㉜：えーなんで？

・なぜ家が壊れたかという M の問いに対して

Y ㉝：前の頁（第12場面）をめくって、だってこれがあるから。

M32：これ？これなに？煙突みたいなのが？

Y ㉞：三個あるから。

M33：三個ある？あー三個あるからぶつかっちゃったの。ふーん。

・きつねをどう思うかという M の問いに対して

Y ㉟：死んだ。

M34：なんで死んだと？

Y ㊱：うーん、急にね、えっとどんなやったっけ、急に、このおうちがどーんと壊れて、（きつねの）首が長くなった（きつねが首を長くして伸びている）のは、えっと、この青いところが（前の頁の青い三つの煙突の所）えっとここに、首にあたって、上に行って、こうやってーポーンといったけ。

M35: Yちゃんきつねさんのこと好き?

Y ③⑦: (首を振る)。/ M36: 嫌い? なんで?

Y ③⑧: だって, すごい間違えた。

M37: すごい間違えた! 何が何が? すごい間違えた?

Y ③⑨: うん, えっと, 青いたねをだして, それを交換してその種がおうちになったけんね, えっとね, 間違いやった。

M38: 種が大きくなったけ間違いやったと?

Y ④⑩: 違う, 種のやつが大きくなった。

M39: うん, なるほど, で, おうちが大きくなって。

Y ④⑪: うん, で, 出て行けて違うこと言ったから。

M40: あ, 出て行けて違うこと言っちゃったから嫌いなの。/ Y: うん。

Y ④⑫: でね, これさあ, これなに? あっこれさあぐりとぐらの, えっとなんかねえ, かすた (カステラか?)

M41: ああ, なんかあるね。(ぐりとぐらがパンケーキを焼いている) 本がねえ。

Y ④⑬: (パンケーキを) 作りよるやつ (話) やない?

M42: そうやね, そうかもしれんね。

考察 Y児のたどる物語理解プロセス

Y児の関心は絵に描かれた人物や物に注がれる。目みたいな点がある飛行機②, 耳にちょん(線)があるのがきつね①。さっきでてきたひよこがまたでてきた④。ゆうじくんはどこにいる⑥? ぐりとぐらの持っているのはなんだろう④。家が壊れたのは家についている煙突が太陽に当たったため④。最後の場面で, きつねがのびているのは煙突が首にあたって首が長くなって⑥, というように絵と絵の情報をつなぎ合わせて考え考えゆっくり話した。きつね(主要人物)について, Mに問われて引き出された反応は, 「すごい間違えたから嫌い。」(反発)である。この言葉もMの繰り返しや言い換えや, 次の思考展開の促しによってようやく紡ぎ出された。Y児は頁ごとの人物についての発見を楽しみながら読み進めていることがわかる。

4. 2. 2 I児(6歳3ヶ月)の反応

第3場面

E43: 「おやまあ, 土の中から豆ぐらいの空色の家が出てきました。」

I ④④: 家? ほんとだ。

E44: 「家(うち)が咲いた! 家(うち)が咲いた!」

I ④⑤: (次の頁をめくりたがる) 笑う。

第4場面

E45: 「ひよこがやってきて, ドアをあけて入りました。」入ったんだって。

I ④⑥: 勝手に? 勝手に。ズコ(身体でずっこける)。

第7場面

E: 「空色の家は, またまた大きくなりました」。

I ④⑦: (人物を一人ひとり指し), 五人。

E: 「そこへ, 太郎と花子が遊びにきました」。

I ④⑧: (人物を指さして) 「太郎と花子」(とつぶやく)。

E: 「しげるとひろしとくみこもきました」。

I ④⑨: (右の子どもを指さしながら) 「しげるとひろしと(女の子を指さしたのでやり直し) 「しげると(しげるとを指さし)ひろしと(ひろしを指さし)くみこ」。

第8場面

E: 「空色の種はすこしも休まないで大きくなっていきます」。

I ④⑩: えっ言ってない人きてる(文章に出ていない動物が家に入っていることを指す)。

E: 「うさぎとりすととがきました。いのししとくまとたぬきがきました」。

I ④⑪: くま, どこ?

E46: どこ? これ? / I ④⑫: これ, たぬき。

E47: え, (じゃあ) くまは? / I ④⑬: くま, どこ?

E48: これじゃない?

I ⑤④: これ、たぬきって言ってるじゃん。(でも) くまかなあ? じゃあ、たぬきはどこにいったん?

E49: おかしいねえ。いのししとくまと、あれ?

I ⑤⑤: いのししと、くま (いのししとたぬきを指さしながら)。

E50: いのししとくまと、これ (くまではなくて) たぬきかもしれん。

I ⑤⑥: なんかみえてないやん (絵にはくまが描かれていない)。

第9場面

E51: 「僕もいれて! 私もいれて! 町中の子どもが」

I ⑤⑦: (二階の窓にいるたぬきを指して) あれ、これたぬきやった。 / E52: うん。

I ⑤⑧: あれ? いのしし、たぬき、くまがおらん。(一階の窓にいるライオンを指しながら、これは) ライオン? (くまではなくライオンなのかとEに確かめる)。

E53: ライオン? ああ、くま、それ (がくま) かもね。

I ⑤⑨: えっライオンやろ、これ。

E54: そりゃそうねえ、あっ、くまいたよ (家の外にいるくまを指してやる) ほら。

I ⑥①: どこ? ああここにおるんか。あとからくるのずるいぞ。

E55: うんずるいね。「森中の動物も、あとからあとからやってきます」(ぐりとぐらを指してみる)。

I ⑥①: あ、ぐりとぐらや。なんでここにおるん。

E56: なんでここにおるんかね。町中の人 came からです。

第10場面

E: 「みんなでていっておくれ」。

I ⑥②: (手を挙げて) はーい。笑う。

E57: Iちゃんなら帰って行く?

I ⑥③: はい。ででで (指を頁に滑らせ、帰っていく仕草をする)。

第11場面

E: 「みんな出ていっておくれ」。

I ⑥④: 要らないもんね。みんな (人物を指ではじく)。

E: 「ドアが開いて子どもが百人 動物が百匹 鳥が百羽出てきました。」。

I ⑥⑤: (人物を数えながら) 1 2 3 4 5 6 7 8。ねえ、ちょっと私かぞえらして。(右のうさぎから)
1 2 3 4 5 6 7 8 (略) 16。

E58: 何人いる? / I ⑥⑥: 16。

E59: でも百匹って書いてるね。「鳥が百羽出てきました。」鳥は? / I ⑥⑦: (目で数えて) 6。

E60: 6羽だね。あっほんとだ。ここにもいるよ (と家の外の木に止まっている鳥を指すと)。

I ⑥⑧: 7羽。 / E61: 7羽だ。

I ⑥⑨: なんでぐりとぐらおるんか。

E62: 何でだろうね。

第12場面

E: 「窓を残らず閉めました」。

I ⑦①: (ドアを指さして) もちろんここも?

E63: ドアも閉めたんだって、鍵閉めて。どうしてそんなことしたんだろうね。

I ⑦①: あけれんけーよ (開けられないようにするため)。

E: 「すると空色の家は急にどんどん大きくなりました」。

I ⑦②: 怒ったんやろ。

E: 「…あ、たいへん! おひさまにぶつかる! ゆうじがさけんだときです。」。

I ⑦③: (目を大きくして集中する)。

第13場面

E64: きつねは伸びちゃった。

I ⑦④: なんでやねん。

E65: おうちがなくなっちゃった。

I ⑦⑤：だって、家引っ込んだんじゃったんじゃない？

E66：どこにいったんかね？

I ⑦⑥：(土を指さして指を下に下げる)。

E67：土に？どうして？

I ⑦⑦：大きくなって、ひゅいひゅいひゅい、大きくなってね(それから指を下に下げる)。

E68：(前の頁をみせて)こんなに大きくなったのにね。

I ⑦⑧：そして(前頁の家を手で上から押さえて下に下げながら)しゅっしゅっしゅっしゅっ。

E69：で、ちいちゃくなったん？

I ⑦⑨：と思うよ。

・なぜ家がなくなったかという E の問いに対して

E70：どうして家はなくなったの？

I ⑧⑩：家が怒ったせい。

・きつねをどう思うかという E の問いに対して

E71：このきつねさんのこと好き？／I ⑧⑪：きらい。

E：どうして？／I：きらい。きつねきらい。

E72：きつねきらい？どうして？

I ⑧⑫：だってさあ、なんかさあ、怖いから。

E73：だって、なんか、どうして怖いのか？

I ⑧⑬：だって悪いことしたけ、怖い。

考察 I 児のたどる物語理解プロセス

I 児は、言葉からの情報と絵の情報を関係付けながら読んでいく。文にはくまが来たとあるのに絵にはくまがいなくて⑤⑩⑥⑩、文には出ていない動物が絵の家に入っていることを不審がる⑥⑥。ぐりとぐらが描かれていることについても、別の話に出てくる人物がなぜここにいるのか不思議に思っている⑥⑩。家が壊れたのは、家を擬人化して家が怒ったためと推測した⑦⑨。そして家は大きくなったが、もとの土の中に引っ込んだとストーリーに沿って想像する⑦⑥⑦⑦⑧。主要人物(きつね)への反応は、結末の展開を疑問に思いながら、きつねに対しては「悪いことをしたから怖い」⑧⑫(反発)と感じている。動作による思いの表現を多用しながら物語に参加し、言葉からの情報と絵からの情報の食い違いにこだわったり、人物の行動の意図を推測しながら読み進めていった。

5 幼児の物語理解プロセスから導出される仮説

5.1 幼児の物語理解プロセスに見られる3つのスタンス

幼児は、物語に没入する際、次のようなスタンスを往還しながら読み進めていることが明らかになった。

- ①当事者として参加 例：指さす。人物に声をかける。事例1：Y 児第9場面 Y ⑬, Y 児第10場面 Y ⑮
- ②見物人として眺める 例：人物の意図を推測する。事例1：I 児第10場面 I ④③
- ③メタ的俯瞰 例：このお話はこういうことと説明。事例1：I 児第7場面 I ③⑥

5.2 幼児の物語理解プロセスに働く思考・認知活動

幼児の言葉や行為に見られる思考活動には、次のようなものがあった。

疑問や納得解を得るための推論／自分の判断の理由付け／予測／対比／可逆的因果^{注6}をつかむ／場面の関係付け／人物の行為の背景を推察

また、幼児の理解過程の特性として、言葉理解以前の知覚(見る聞く)による理解、運動(指さしや身体表現)による理解の表出、物語や人物(共感と反発)への自分事的参入があげられる。とりわけ、運動による理解・表現活動がしばしば起こることは注目される。

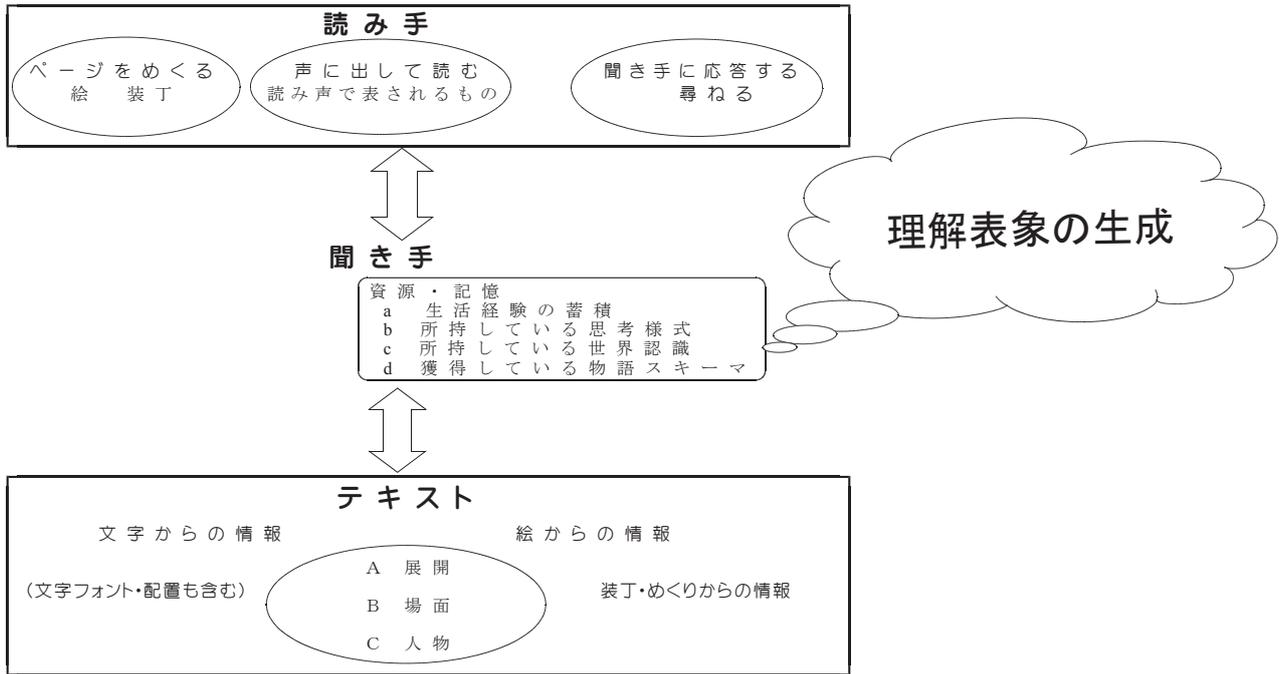


図 1

5. 3 物語理解プロセスモデル

これらの事例から、幼児の物語理解過程に存在するモジュールは、図1のようなモデルで説明できる。テキスト側のABCに基づく表象と読み手のパフォーマンスに導かれ、読み手が自分の資源(a～d)を働かせて入り込み、これらのスタンスを往還しながら反応していく。その反応を受容し、確認・言い換え・感想付与等をかえす読み手との相互作用によって理解が進展し、理解表象が形成されていくと考えられる。

5. 4 幼児の物語理解を促進する読み手側の働きかけ

幼児は、モデル図1のような理解プロセスを、5. 1に示した、3つのスタンスを往還しながら進んでいくことが明らかになった。

この活動を支え、促進する読み手(M・E)の働きかけとして以下のような構えが指摘できる。

幼児へ共感に寄り添う／幼児と共に物語世界を生きる共存的存在となる／応答の相互作用の中で生まれてくる幼児の考えの展開を待つ

この構えに基づいてなされる、読み手による効果的な働きかけを具体的に示しておきたい。

幼児の反応表現のリボイス／見守り(問)／自問の促し(どうしたらいいのかな)／物語への移入の促し(〇〇ちゃんならどうする?)／示唆(このこと?)／思考を促したり理解を表現する適切な語彙の提供や構文の整え(人物が〇〇したから〇〇になったんだね)／物語スキーマを呼び起こす(物語のはじめは〇〇だったけどおしまいは〇〇だったね)

これらのポイントは、小学校入門期における、物語を扱った授業のあり方を考える手がかりとなる。つまり、読み手(教師)と聞き手(児童)の信頼関係を基盤に築き、教師は教室空間で児童と共に物語世界を生きる共創的存在となり、応答的なやりとりの文脈の中で発せられた「概念的な言葉」以前の「からだ語」を受けとめ、すくい上げて適確な言葉に置き換えて提供していくのである。国語科授業においてこのような読みのプロセスを教師が児童と共に共創していく中で、児童の物語理解活動が促され、物語理解を促進する知識が増し、物語スキーマが児童の中で育まれていくのではなかろうか。

6 課題

本稿で導出された物語理解モデルは2事例から導出したものである。今後はこれをさらに精緻化し、検証しながら、妥当性を高めていきたい。

注及び引用文献

- 注1 見物人的スタンスとは、物語の内容に対し、ある一定の距離をとりながら眺めている評価的な反応を指す。山元隆春（2011）『文学教育基礎論の構築』溪水社 pp.529-537 参照
- 注2 『岩波講座 コミュニケーションの認知科学2 共感』2014 岩波書店 pp.103
- 注3 例えば、川崎恵理子編（2014）『文章理解の認知心理学 ことば・からだ・脳』（誠信書房）では、「構造・構築モデル」「記憶ベースモデル」「ランドスケープモデル」「イベント・インデクスモデル」が挙げられている。
- 注4 鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会
- 注5 注4では、関与観察とは、Sullivan,H.S.の「関与しながらの観察」を指し、「一方で患者に関わりながら他方で患者の様子を観察するという二つの行為を縮めて表現したもの」と説明されている。
- 注6 内田伸子他（2014）「乳幼児の論理的思考の発達に関する研究－自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる－」『保育科学研究』5 日本保育協会 pp.131-139
- ・内田伸子（1983）「絵画ストーリーの意味的統合化における目標構造の役割」『Jap.J.of Educ.Psychol』VOL.XXXI No4
 - ・内田伸子（1989）「非具象的絵画ストーリーの構成的理解における”欠如－補充”枠組みの発達」Japanese Journal of Educational Psychology 37 pp.327-336
 - ・久保ゆかり（2017）「共感的理解における類似経験想起方略の発達」『日本教育心理学会第34回総会発表論文集』発達 259
 - ・小林真（1997）「集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応」『児童文化研究所所報』上田女子短期大学児童文化研究所 pp.11-13
 - ・米田英嗣（2010）「第11章 物語理解と社会認知神経科学」楠見孝編『現代の認知心理学 第3巻 思考と言語』北大路書房 pp.270
 - ・正置友子（2018）『メルロ＝ポンティとく子どもと絵本>の現象学－子どもたちと絵本を読むということ－』風間書房 pp.4-6
 - ・佐々木由美子（2012）「幼児は『そらいろのたね』をどのように読んでいるのか－物語の受容と子どもの育ちにおける物語の役割」『東京未来大学研究紀要』5 pp.31-40.
 - ・沢田端也・田代康子・小林幸子・高木和子（1973）「絵本のおもしろさの分析－内容の分析と読み聞かせ中の反応を中心として－」『読書科学』, 17（3・4）, pp.81-93
 - ・高橋登・杉岡津岐子（1994）「幼児事の物語理解への物語の繰り返し構造の影響について」『発達心理学研究』5（2） pp.111-122
 - ・福田真美（2017）「絵本の読み聞かせに対する幼児の反応－物語世界との関わりについての検討」『日本教育心理学会第47回総会発表論文集』PA033
 - ・やまだようこ（2017）「第4章前言語期のコミュニケーション」、『言語発達とその支援 講座・臨床発達心理学5』臨床発達心理士認定運営機構監修 秦野悦子・高橋登編著 ミネルヴァ書房 pp.88
 - ・由井久枝（2002）「幼児の物語理解に影響する要因」『教育心理学研究』50 pp.421-426

謝辞 本稿をなすにあたって多大なご協力をいただいた堤久美さんに心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。